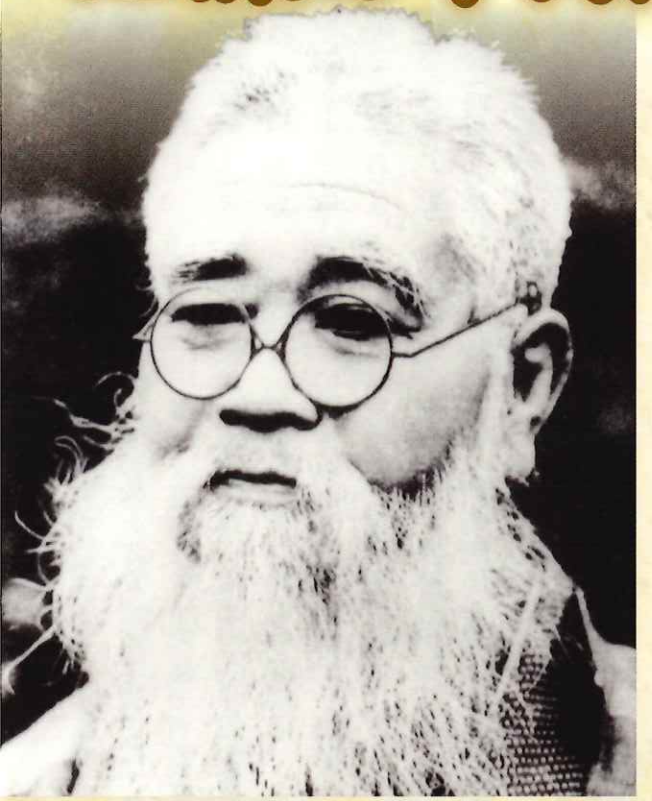
特別収蔵展

俳人 松島十湖（まつしま じっこ） 没後100年記念

旧派の十湖（じっこ）・新派の加藤雪腸（せっちょう）

二人展

立場は違うが
共に浜松の俳句文化の隆盛に尽くした俳人
生涯や作品を紹介します



はままつは
出世城なり
初松魚

十湖

「今芭蕉」と呼ばれ、松尾芭蕉を敬愛する俳人
全国に門人をかかえ活躍

わが眼の前を
よぎる蟹
それぞれの
鋏のあかく

雪腸

正岡子規の門人　論文「浜松の新俳壇を担う」を発表
俳壇・歌壇の指導的地位に…

会期 令和8年
3月1日(日)～6月14日(日)

時　間　午前9時～午後5時
会　場　浜松文芸館 展示室（クリエート浜松5階）
主　催　浜松市　（公財）浜松市文化振興財団
協　力　浜松市東行政センター　松島知次　源長院

入場無料
3月9日(月)は休館
4月以降も月曜日が休館となる場合があります。お問い合わせください。

浜松文芸館

〒430-0916 浜松市中央区早馬町2番地の1
電話・FAX 053−453−3933

公益財団法人
浜松市文化振興財団
Hamamatsu Cultural Foundation
浜松文芸館の管理・運営は浜松市文化振興財団が行っています。

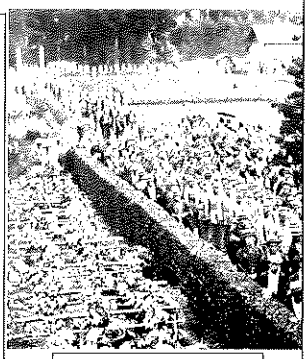
●JR浜松駅より徒歩10分　遠州鉄道「遠州病院駅」東隣
遠鉄バス「県総合庁舎」、「常盤町」バス停下車
●クリエート浜松には専用駐車場がございません。
提携駐車場OGURIパーキング1・OGURIパーキング2をご利用の場合は、一律200円引き（40分無料）いたします。
1階事務室前の認証機に駐車券をお通しください。

松島十湖（じっこ）年譜

本名「吉平」天竜川右岸の由緒ある農家の長男に生まれ、五歳から読書習字などを学び、十歳から小笠郡横須賀村撰要寺に住み込み、漢籍、書道、仏典を学びました。そして、十四歳の時、大瀬村の栩木夷白（とちぎいはく）に弟子入りし、俳句を学び始めました。その後も学び続けた十湖は、十八歳の時、小田原の福山滝助に二宮尊徳の報徳の道を学び、人のため、世のために行動する人生を歩んでいきます。

一八四九（嘉永二）年三月十七日　中善地村（現豊西町）に生まれる
一八六三（文久三）年　一四歳　大瀬の俳人年立庵栩木夷白に入門　俳号十湖
後に、許されて十六歳で判者披露をする
一八六七（慶応三）年　一八歳　小田原の福山滝助から報徳の道を学ぶ
一八六八（明治元）年　一九歳　夷白から年立庵の号を継承
一八七二（明治五）年　二三歳　中善地村に三才報徳社を組織、社長になる
一八七三（明治六）年　二四歳　戸長制度実施、中善地村戸長となる
一八七五（明治八）年　二六歳　天竜川堤防決壊を率先指導により防ぐ
一八七六（明治九）年　二七歳　浜松・静岡両県合併、静岡県会議員となる
一八八一（明治十四）年　三二歳　西遠吟社設立
一八八三（明治十六）年　三四歳　十湖発起による天竜川豊田橋完成
一八九八（明治三一）年　四九歳　俳友団体日本正風会発足、会頭となる
一八九九（明治三二）年　五〇歳　遠蕉風会設立、会長となる
浜名郡会議員当選　議長となる
一九〇一（明治三四）年　五二歳　芭蕉贈位運動で上京　春湖十七回忌追福
献詠会開催　東北に吟行　各地の俳人と交流
一九〇六（明治三九）年　五七歳　浜名郡会議員満期　この後公職を離れ、報徳と俳諧に専念　全国各地を吟行
一九一一（明治四四）年　六二歳　鷹野弥三郎と岸つぎの結婚実現のため、つぎを養女とする
一九二六（大正十五）年　七七歳　浜松鴨江寺に十湖の銅像建立（太平洋戦争で供出）
七月十日　死去　村葬が源長院で行われる　今年が没後百年

【十湖作品】
風かるくわたるや月の山はなれ　大蕪十湖



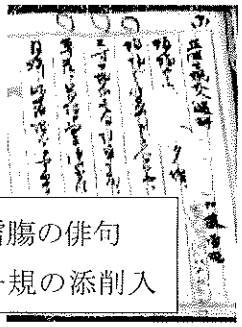
十湖の葬儀（写真　源長院蔵）

多数の参列者が田畑の向こうまで続く

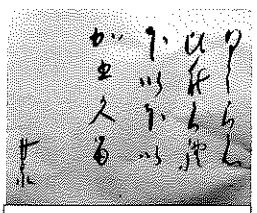
加藤雪腸（せっちょう）年譜

本名「孫平」榛原郡(現在の牧之原市)生まれ。静岡師範学校在学中に正岡子規の門下に。浜松中学に教師として赴任し、子規が提唱する新派の俳句を広めていき、後年、歌壇、自由律俳句に傾注します。子規同門の高浜虚子、河東碧梧桐らや自由律俳句の荻原井泉水、中沢一碧楼、歌人の石川啄木など多くの文人との交わりがあり、浜松の俳壇・歌壇の指導的立場にありました。昭和７年５７歳で交通事故死。

一八七五（明治八）年　榛原郡生まれ
一八九四（明治二七）年　静岡師範学校入学
一八九五（明治二八）年二十歳　正岡子規の門下に入る
一八九六（明治二九）年　静岡民友新聞の俳句選者になる
一八九七（明治三〇）年　師範学校卒業　地元小学校の訓導　翌年二十三歳で庵原小学校校長兼訓導に
一九〇五（明治三八）年三〇歳　浜松中学教諭となり浜松に転居
翌年句会「瓢々会」結成
一九一三（大正二）年　短歌結社「曠野（あらの）社」創立
一九一六（大正五）年四一歳　浜松市田町の明石合名会社に転職
一九二二（大正一一）年　本格的に歌壇へ
一九二四（大正一三）年　俳句に戻る
一九二五（大正一四）年五〇歳　子規の句碑を建立　高浜虚子を招いて除幕式挙行
一九二六（大正一五）年　自由律俳句を研究し翌年自由律俳句誌発行
一九三七（昭和七）年五七歳　浜松市内森田踏切で交通事故に遭い死去



雪腸の俳句
子規の添削入



萩原井泉水の書